

RadioDays



ラジオデイズ

声には、
人の体温があり物語がある

6

June Edition
2007, vol.1
Free of charge

月刊「ラジオデイズ」6月号（通巻第1号）

2007年6月8日発行

【発行人】赤塚祐一郎

【編集人】大森美知子

【発行所】株式会社ラジオカフェ

東京都新宿区新宿1-6-5 シガラキビル 6F

Email: info@radiodays.jp FAX: 03-5356-8281

この人の声が聴きたい◎6月

降りてきた詩人、 到来する言葉

小池昌代さん（詩人・作意）



一九五九年東京深川に生まれる。津田塾大学国際関係科卒業、法律関係の出版社勤務。九七年に『永遠に來ないバス』（思潮社）で第十五回現代詩花椿賞。以後、『もともと官能的な部屋』（書肆山田）で高見順賞。初のエッセイ集『屋上への誘惑』（岩波書店）で、講談社エッセイ賞。そして「新潮」六年九月号掲載の「タタド」で第三十三回川端康成文学賞。これが、小池昌代さんの略歴である。ひとりの人間が、詩を書き、エッセイを書き、小説を書くということはありうる。しかし、そのどれもが文学賞の受賞作になるほどの水準に達するとは稀有なことだ。最初は、生活の中の微細な感覚を拾い上げることのできる上手い詩人の一人だと思っていた。しかし、エッセイを読み、小説を辿り、朗読を聴くうちに、「上手い」というだけでは足りないものを感じるようになった。その感じを言葉にすればこうなる。『いったい、小池昌代とはなにもなのなか』

先日、ラジオデイズのラジオ番組で彼女と対談する機会を得た。私はこの僥倖に件の疑問の答え（の尻尾）を掴んでみたいと思った。ひとりの人間についてよくわからないというときは、彼／彼女の思想がわからないというところはあるだろう。しかし、小池さんの場合、お会いしてお話ししてみれば、十年來の知己

のごとく、同じ景色に共鳴し、同じ料理を堪能し、同じ詩作品に感動することができる隣人のひとりであることがわかる。では、彼女の使う言葉が独特で、分かりにくいかといえ、作品のなかに晦渋な言葉を探さうが難しいといった具合なのである。そこに彼女の謎がある。つまり、私には詩人としての彼女の出自がよくわからないのである。系譜が見えないといってもよい。

彼女は大学を出てから、法律関係の出版社に勤務していた。ひよっとしたら、私たちは有能な法律書の編集者を得て、稀有の詩人と出会うことはなかった可能性もあった。詩人小池昌代は、あるときふわっと降りてきたような、特権的な詩人なのである。いや、彼女の身体を借りて詩神が到来したというべきかそう考えなければたとえば次のような詩句を私たちは想像することができない。

そばを子供が通りすぎる
あかさたな
はまやらわ
ん
と、つぶやいている

（日曜日）（水の町から歩きだして）思潮社刊より

平川克美（ラジオデイズプロデューサー）

ラジオの街で逢いましょう

ラジオデイズでは、声と語りの魅力を求めて、ラジオ番組も制作・放送しています。それが深夜のトーク番組『ラジオの街で逢いましょう』です。毎回さまざまな分野で活躍中の個性的なゲストをお迎えして、その方ならではのエピソードや深みのあるお話をおうかがいしていきます。

「放送」ラジオ関西 毎週火曜日の深夜、24時半から午前1時まで。

今後の放送予定（6～7月のゲスト）

- 6月
- 5日 上野茂都（三味線師）
- 12日 田中優子（江戸学）
- 19日 青山 南（翻訳家）
- 26日 中路良子（京都・上七軒）
- 7月
- 3日 土井信子（料理研究家）
- 10日 穂村 弘（歌人）
- 17日 園田榮治（歌舞伎解説・雑俳宗匠）
- 24日 原賀真紀子（ジャーナリスト）
- 31日 内田 樹（現代思想家）

パーソナリティは、ラジオデイズのプロデューサーの平川克美、菊地史彦、ディレクターの大森美知子、そして大阪は140Bのスーパーマルチエディター江弘毅が務めます。アシスタントは、五十川藍子と浜菜みや。これまでの放送分は、たぐいまラジオデイズのティザーサイトにて、ストリーミング放送中です。真夜中の語らいに、ぜひ耳を傾けてみてください。

※これまでの、ラジオの街の深夜のお客様

柳家小糸（落語家）・大友浩（演芸研究家・関川夏央（作家）・神田西（講師）・大西ユカリ（歌手）・旭堂南海（講師）・佐藤嘉尚（元「面白半分」編集長）・西江雅之（文化人類学者）・小池昌代（詩人）

<http://www.radiodays.jp>

オリンパスシンクろ寄席

「日時」 6月28日(木)午後6時45分開演(午後6時30分開場)
「場所」 お江戸日本橋亭(半蔵門線 銀座三越前)

すべての落語は新作として生まれ、生き残ったものが古典に「なる……、そんな過酷な道に進んで身を捧げる人々がいます。それは新作落語の演者です。時代の流れから生み出された二席の噺を、口演を重ねながら書き換えていく。そんな現代の落語ばかりをコレクションしました。毎回二人の演者が新作落語を二席ずつ競演します！

昔昔亭桃太郎

春風亭柳昇入門、一九八〇年真打昇進。趣味は、一人旅喫茶店めぐり。ビートルズ、プレスリー、裕次郎になる夢を捨て、本人曰く地道な落語人生をゆく。幅広い趣味と思索活字中毒が奏効しての奇想で客を七転八倒させる最強のナンセンス王者！



古今亭錦之輔

古今亭寿輔入門、一九九八年二ツ目昇進、現在に至る。趣味は、男のロマン、早押しクイズ、忍法。暴走する想像力と妄想力にトリビアのディテールが利いて、不思議なリアリティが現出する。独特の文学的世界に観客をひきずりこむ若きストーリーテラーである。



明烏い話

連載第2回

本田久作

志ん生は戦前極貧生活を送った。貧乏だったのは売れていなかったからだ。その志ん生が戦後売れに売れた。何故売れたのか？ 小林信彦は志ん生のシュールな笑いのセンスが戦前の客には伝わりにくかったからだろうと言っている。これも一理あるかもしれないが、それまで志ん生のギャグを理解できなかった人たちが、戦争が終わった途端志ん生の噺で笑いだすとは思えない。満州で苦勞したおかげだ、と言う人もいる。たしかに同行した円生は苦勞しただろうが、志ん生はなめくじ長屋で暮らしていた時以上の苦勞を満州で味わったのだろうか。

私は志ん生が売れたのは志ん生が売れたからだと思う。説明になっていないと反論されるだろうが、こうしか言いようがない。志ん生は元々売れてもおかしくない芸人ではあったのだ。文楽の上手さを強調するあまり志ん生の技術に言及する人は少ないが、志ん生は技術面だけ見てもすばらしく高度な噺家である。おまけにフタもあるし、芸はオリジナリティにあふれている。だが現実には売れない時期が長かった。そして戦前のそんな志ん生が売れなかったのは理由はなかった。芸人というのはいかに売れないものだからだ。売れないことが芸人にとって普通のことであって、売れることの方が異常事態なのである。けれども噺家の中には心技体ではないけれど、

落語を演じる上で必要なものを全て持ちながら、ただ「売れている」ということだけが欠けている人が結構いる。そして怖ろしいことに「売っていない」というただそれだけのために、その人本来の力を十全に発揮できない場合が多い。それほど「売れる」ということは芸人にとって重要なことなのだ。そして売ればようやくやくそくの芸人は本当に「売れる」地点にたどりつくのである。

たとえば林家三平だ。三平が売れる前に彼の芸を聞いて、将来売れると予測したのはノストラダムスだけである(嘘です)。あれは売れたから通用した芸であって、売れない芸人が同じことをしたら辛くって聞けたものではない。言っておくが、これは悪口ではない。三平は芸は二流だが芸人としては超一流である。だから、彼も戦前の志ん生同様売れてもおかしくない芸人ではあったのだが、その三平が売れたのはやはり三平が売れたからだとしか言いようがないのである。

それだけだ。だがたいはいの芸人には、この「ただそれだけ」がなかなかやって来ないのである。三平に至っては私には何故彼が売れたのか推測すらできない。

落語を聞きだして四十年近くになる私が一度だけこの「ただそれだけ」に巡り会ったことがある。談志が談春の『包丁』を「俺よりうめえ」と評したのだ。談志ファンなら談志にとって『包丁』がどんな意味を持つ噺か誰もが知っている。その談志が弟子の演じる『包丁』を自分よりも上手いと誉めたのだ。これで談春に興味を持たなければ談志ファンではない。かくして談春は売れた。もともと談春には売れるだけの素質があったのだと言う人もいるだろうが、素質があるのと「売れる」のとはカレーとウンコぐらいの違いがあるのである。

●ほんた・きょうざく

一九六〇年兵庫県生。ライター。二〇〇二年の「私の遊び」が国立演芸場日本募集佳作受賞以来、落語、漫才など新作台本関係の賞を毎年総ナメの業界注目の新進作家。主な受賞作「玉手箱」(国立演芸場日本募集優秀作)、「儂の葬式」(按摩の夢)、「幽霊蕎麦」(いずれも落語協会優秀賞)など。



第2回 ラジオオデイズ落語会

〔日時〕6月8日(金)午後7時開演(午後6時半開場)

〔場所〕ライブカフェ・アゲイン(東急目黒線 武蔵小山)

江戸時代から明治時代に作られ、数多の噺家によって高座にかけられ、時を経て世相に洗われて、そして語りつがれてきたのが古典落語。それを自家薬籠中に演じきる現代の噺家たち！ 人情の機微に触れ、免疫力増進の涙と笑いの宝庫、至福の話芸の真剣勝負。開口一番は、毎回気鋭の二つ目さんをお願いします。

入船亭扇遊

(いりふねてい・せんゆう)

入船亭扇橋に入門、昭和六〇年の真打昇進以前よりエヌ新人落語コンクール優秀賞、国立演芸場若手形演芸会金賞等々、若くして頭角を現し、粋で華やかな高座はいかにも良いかたちだが、「何もしないこと」が趣味となれば、落語ひとすじの潔さか。



桃月庵白酒

(とうげいあん・はくしゅ)

五街道雲助に入門。平成一七年、三代目桃月庵白酒を襲名、同年第十回林家彦六賞受賞の気鋭の若手である。趣味はポタリング、音楽、映画と幅広く、作務衣の似合う柔和な風貌と温もりのある声質とは裏腹な辛口の洞察力が聞き手を惹きつける。



柳家ろべえ

(やなぎや・ろべえ)

平成一八年二ツ目。師匠の柳家喜多八による命名は東海道中膝栗毛から。お客から野次が飛ぶと「弥次郎兵衛になります」。農工大で応用物理学専攻の利発な明るさが楽しい。



●お囃子

松本優子

(まつもと・ゆうこ)



味な脇役・話芸の「きまり文句」

芸

連載第1回

落語・講談のなかでは、芸とはどういうものかについて直接に述べるといふよりも、名工・名匠などを主人公にした「名人伝」というべきジャンルのストーリー群のなかで間接的に「芸・芸人」についての教訓句が引用されることが多い。

前席を見て侮るな、真打を見て恐れるな

これは六代目桂文治の芝居噺「本能寺」(鍋草履)のこと)の冒頭に出てくる昔からの教え。「どんな稼業でも稼業というからには難しい。客から見れば、噺家というのは気楽な商売に見えるだろうが、上下の顎がぶつかり放題に喋るなどというのは、名人上手でなければできない」技である。客を南瓜だと思ふような図々しさが身につけば真打。対して前座のうちはナイーブで、とにかく一生懸命演じるものだ。真打だつて続き物を演つていれば時には出来の悪い日もあるもので、前座のなかにも上手い者があるのだから、前座だからまずい、真打だから上手いとは一概に言えない、だから前座の出ているうちに一眠りしてやれ、と思うのは間違いだというのである。

名人は上手の坂を一登り

松井高志

「名人上手」などと、安易にひとくくりにしてはいけならしい。この川柳は、名人伝である「浜野矩随」や「竹の水仙」(左甚五郎)などでよく引用される。昔から上手はたくさんいるものだが、なかなか名人というのは出現しないものだぞうだ。大島伯鶴の十八番である講談「寛永三馬術」では、「名人と上手との間には天地の差がある」という。これは、愛宕山の石段に騎馬で挑んだが、あえなく失敗して転落死した馬術の「上手」三名と、成功して山上の梅を折り取った名人・曲垣平九郎盛澄との違いをさす。が、「馬に乗る技量に於いて、名人と上手にどれほどの差があるかという見分けは容易につくものではない」(同)、すなわち凡人には分からない「違い」なのだ。

●まっぴーたかし

一九六〇年愛知県生。元月刊誌編集者を経てフリーライター。著書に『半四郎の出世 十右衛門の背後』(レビュージャパン)、『人生に効く一話芸のきまり文句』(平凡社新書)など。『話芸のきまり文句』辞典 サイト <http://id.hatena.ne.jp/mstsuikitakashi/>



ラジオデイズ落語会 (毎月第2金曜)

【会場】Live Cafe Again (武蔵小山)
【時間】午後7時開演(午後6時30分開場)
【木戸銭】2500円

●第3回 7月13日(金)
瀧川鯉昇 入船亭扇辰 立川志の吉

●第4回 8月10日(金)
五街道雲助 柳家三三 柳亭こみち

※(ご予約申込開始は各回前月1日から、ラジオデイズURL <http://radodays.jp>もしくは、予約受付専用電話〇三―三三四―二二三〇より、先着順です。

オリンパスシンクする寄席 (毎月1回不定期)

【会場】お江戸日本橋亭
【時間】午後6時45分開演(午後6時30分開場)
【木戸銭】2000円

●第3回 7月4日(木)
林家しん平 春風亭栄助

●第4回 8月30日(土)
柳家喬太郎 瀧川鯉朝

※(ご予約は、オフィスM〇三―三九九―三三三五まで

ラジオデイズは、文芸・対話・話芸を三本の柱に、声のもつ魅力に特化した音声コンテンツを制作し、ダウンロード販売するWebサイトです。飄逸で含蓄のある随筆、瑞々しい感性の横溢する詩歌や小説の朗読、個性的な対話者たちの真挚な言葉の応酬から生まれる知的交歓、粋と人情の落語や講談などなど、大人のお楽しみにもたえる魅力的なコンテンツが満載です。9月より本番サイトがスタートします、ごうご期待!

皐月の落語会ふたつ

第一回ラジオデイズ落語会(五月十八日)は、満員御礼の熱気のなか、武蔵小山のライブカフェ・アゲインで開かれた。五人の噺家による熱い競演で上々のスタートをきった。前座の初音家左吉さんが「子ほめ」で会場を盛り上げ、古今亭菊可さんの「家見舞」でさつそく大笑い。

つづく柳家小糸ん師匠は三遊亭圓丈作「フイツ」。喜・怒・哀・楽・フイツ。こそが人間の感情の根底に流れる大切なものであり、正常な人間なら言葉をしやべる合間に無意識のうちに「フイツ」という音を発声するものであり。そうでなければ恐ろしい病いを患っていることになるという顛倒した噺。こういう馬鹿げかしい噺をさせると小糸ん師匠の右に出る者はいない。

お中入りの後は、三遊亭遊雀師匠の「明烏」。遊雀師匠は高座に上がると艶っぽくなるから不思議だ。超堅物の若旦那がお稲荷さんにお籠もりと騙されて吉原に連れて行かれ大騒ぎとなる。昭和の大名入・先代桂文楽で有名な噺である。遊雀師匠は細部を丹念に描写して、いまや誰も経験したことのない廓をいきいきと蘇らせ、翌朝にはうぶな若旦那が引率の不良たちを圧倒するという面白さを熱演した。

トリは柳家喜多八師匠の「粗忽の釘」。うっかり者の大工が、うるさいかみさんに箆を掛ける釘を打つよう頼まれ、長屋の薄い壁に長い八寸釘を打ち込んでしまったことから事件は起きる。粗忽者の噺は、人間国宝だった先代小糸ん師匠、小三治師匠から受け継いだ柳家の正統、喜多八師匠の得意技だ。いつものようにはじめゆったり徐々に噺が速くな

りどつと落とすという、序破急が利いた巧さが光った。

ラジオデイズでは、これに先立ち新作中心の第一回オリンパスシンクする寄席(五月八日)をお江戸日本橋亭で開催した。創作落語の宗匠三遊亭圓丈師匠と旗手である柳家小糸ん師匠のガチンコ競演が実現。圓丈師匠はシュールな「幽霊物件コレクター」と、マッターホルンの頂上にうどんを出前する職人の心意気が力強い感動を呼ぶ「遙かなるためぎうどん」。小糸ん師匠は鉄道オタクの悲喜劇を描いた「鉄の男」と、糠味噌樽の中に吸い込まれた嫁が古漬け茄子に窘められて姑と和解するというSFホームコメディ「樽の中」。こちらも大盛況抱腹絶倒のうちに無事録音を終えた。なんとも贅沢な夜だった。ダウンロード販売開始が待ち遠しいが、ラジオデイズ本サイトオープンには九月を予定している。



オリンパスシンクする寄席の"楽屋口(〇〇)"

シンクする寄席オリジナルコンテンツ"楽屋口(〇〇)"が携帯電話からお楽しみいただけます。



まずは、左の2次元バーコードを携帯のカメラで写してあらかじめ無料画像認識アプリ Sync ★ R (シンクする) をダウンロードしてください。

QRコード、または <http://gwmj.jp> (オリンパスのシンク★R公式サイト) に空メールを送信すると、ダウンロード先URLが記載されたメールが返信されてきます。つぎに、Sync ★ R (シンクする) アプリを起動して、各ページにあるマークを携帯のカメラで撮影して保存・送信すればOK。オリンパスシンクする寄席のチラシのマークでもラジオデイズのお楽しみコンテンツをお楽しみいただけます。※このとき、それぞれのマークの全体が入るように、ピントが合うところまで離れて撮るようにするのがスムーズにダウンロードするコツです。どうぞ、お試しあれ!

シンクする (Sync ★ R) とは?

オリンパス株式会社の開発による、先進の画像認識技術に応用したカメラ付き携帯電話用アプリのこと。新聞・雑誌などの紙面やテレビ画面上の画像を撮影するだけで、モバイルサイトへのアクセスを可能にします。

ラジオデイズの毎月ふたつの定期落語会も始動し、ラジオの街にはすでに両手に余るほどの素敵なお客様をお迎えした。大きな窓から緑濃い新宿御苑を臨むラジオデイズのオフィスでも毎日のように、何かに邁進、もしくは精進、あるいは耽溺している人々が往來を繰り返している。それぞれ特徴ある人々の声に温もりを感じ、繰り出される言葉に耳も心も澄ませて、伝え合うことの豊かさを味わう。ラジオデイズの音声コンテンツには、背後の光や闇までも潜ませていきたいと思う。